２０１０年代の坂元裕二作品はどれも傑作で、一作ごとに新境地を切り開き作家性を確立している。逆に言うと、次に何をやるのかわからない表現の更新こそが脚本家としての一番の魅力だと言えるだろう。この章では坂元が何を獲得していったか、発表した連続ドラマを順番に紹介しながら分析していく。

『Mother』

２０１０年の春クール（4～6月）に日本テレビ系の水曜ドラマ（水曜夜10時枠）で放送された『Mother』は、坂元裕二にとって大きな転機となった作品だ。

本作は、室蘭で小学校の教師をしていた鈴原奈緒（松雪泰子）が、母親から虐待されていた生徒・道木怜南（芦田愛菜）を助けるために誘拐して鈴原継美と名付け、偽りの母娘として逃避行する姿を描いた物語。こう書くと手に汗にぎるサスペンスを想像するかもしれないが、ミステリー小説的なストーリーテリングは放棄されており、逃避行という物語はあくまで状況設定に過ぎない。

また、児童虐待を扱い劇中に赤ちゃんポストをめぐるやりとりが登場することから、『Mother』は社会問題を扱った社会派ドラマと言われることが多く、本作以降、社会問題を扱うドラマ脚本家という坂元のイメージは決定的なものとなる。

ただ、逃避行も児童虐待も、あくまで状況設定という「背景」である。全面に打ち出されているのは、そういった特殊なシチュエーションの中で行われる役者の演技であり、奈緒と継美の血の繋がらない母娘という関係性が持つ魅力だ。

プロデューサーは次屋尚。チーフ演出は水田伸生。二人は日本テレビ系の坂元裕二作品をその後、多数手掛けることになるのだが、これまでの作品と大きく違うと思うのはやはり映像ではないかと思う。

テレビドラマを褒める際に「映画のようだ」という言い回しを使うのは、テレビドラマを無意識に映画より下に見ているように聞こえるためできれば避けたいのだが、言葉による説明を最小限に抑え「映像」で語ろうとする本作のスタンスは「映画的」だと言って間違いないだろう。[1]

特に室蘭を舞台にした第1話の風景の切り取り方が素晴らしい。シナリオブックを読むと空を渡っていく無数の渡り鳥の描写など、撮影の手間暇を考えると難しそうなシーンも多く、水田監督なら撮ってくれるだろうという信頼が伺える。

そして、奈緒と継美の会話がとても面白い。これも会話の中身というよりは関係性の見せ方

が絶妙で、子どもが苦手で距離を取ろうとしている大人の女性と、無邪気に距離を詰めてくる少し変わった少女のユーモラスなやりとりが続き、観ていてほっこりする。

二人のやりとりは『わたしたちの教科書』で珠子が明日香を児童相談所に連れていく場面に近く、もしも珠子が明日香を預けずにあのまま一緒に暮らしていたら奈緒と継美のようになっていたのかもしれない。しかも奈緒は元教師で、5歳の時に母親から捨てられ児童養護施設で育った後、鈴原家に引き取られたため、義理の母である籐子（高畑淳子）と二人の妹に対して負い目を感じて、10年間実家に立ち寄っていないという複雑な背景を抱えている。これも珠子と重なるのだが、弁護士のような職業的な力を持っていないため、特別な力を何も持たない女性がどうやって逃げるのか？という緊張感を生み出すことに一役買っている。

継美が「すきなものノート」に書いた「まわるいす、まがってるさかみち、おふろばでできこえ、ねことめがあうこと」といった言葉の羅列も、明日香と朋美のしりとりのシーンを思わせ、『わたしたちの教科書』に登場した宮沢賢治の童話を思わせる言葉の表現を用いることで子どもの世界の美しさを描こうとしていたことがよくわかる。

そんな子どもならではの面白さの裏に両親の虐待という残酷な現実が張りついていることによって、物語の緊張感と会話の複雑さが増している。

一方、室蘭から逃げた奈緒と継美は、行く先々で様々な人々と出会う。かつて奈緒が入所していた児童養護施設の園長で今は認知症の野本桃子（高田敏江）。奈緒を捨てた実の母親である

ことを隠して、二人の逃避行を支え〝共犯者〟となる「うっかりさん」こと美容師の望月葉菜（田中裕子）。東京で会社を経営する奈緒の育ての親・籐子。鈴原家の次女で、授かり婚をしてこれから母親となるが、胎児の心臓に障害があるため、中絶しようか悩んでいる芽衣（酒井若菜）。そして娘の怜南（継美）を虐待していたシングルマザーの道木仁美（尾野真千子）。

奈緒と継美の正体に気づき、口止め料を要求する雑誌記者の藤吉駿輔（山本耕史）や、仁美の愛人で怜南を虐待し性的欲望を見せる浦上真人（綾野剛）のような印象に残る男性も存在するが、主要人物の多くは女性で、様々な悩みを抱える母親たちと偽りの母娘が出会う中で「母とは何か？」と問いかける物語となっている。

その意味でテーマがはっきりとしたコンセプチュアルなドラマなのだが、安易な母性礼賛に回収されなかったのが本作の優れたところだ。

第3話で奈緒は、親は子に無償の愛を捧げるというが、あれは逆で「小さな子が親に向ける愛が無償の愛だと思います」と葉菜に言う。継美を助けたことをきっかけに、奈緒は疎遠になっていた血の繋がらない家族と、自分を捨てた母親と再会しそれぞれの母娘関係をやり直すことになる。よく「子は鎹」と言うが、継美の「無償の愛」が結果的に母親たちを救っていく物語になっていると言えるだろう。

このように、『Mother』は坂元裕二にとって新境地と言える作品となったが、一番の達成は娘を虐待する母親・道木仁美を描いたことだろう。

第８話（演出：長沼誠）。怜南を迎えにきた仁美は奈緒と対峙するのだが、物語は唐突に２００３年の過去にさかのぼり、赤ん坊に母乳を与える仁美の姿が映し出される。テレビには子どもを虐待死させた母親のニュースが流れるが、仁美は「こんな親、普通じゃない。人間じゃないのよ」と怒りを露わにして怜南のことを一生大事にすると誓う。

２００５年。仁美は働きながら娘を育てていた。生活は苦しそうで、父親が亡くなり一人で育てていることが明らかとなる。友達に会おうと誘われても断り、母親としての務めを果たしていたが、子どもゆえに好き嫌いの多い怜南に対して手を焼いていた。そこから子育てに追われる中で友達の集まりにも行けず、生活に困窮し家事が追いつかなくなっていく仁美の姿が描かれ、じわじわと彼女は精神的に追い詰められていく。そして、子どものしつけのためにおこなったデコピンをきっかけに虐待が始まり、真人と付き合い初めたことをきっかけに服装も派手になっていく。ただ、そんな過酷な状況でも仁美と怜南の間には親子の交流があり、クリームソーダを「食べ物だ」という怜南のかわいらしい発言も仁美の影響だったことが明らかとなる。

仁美が追い詰められていく姿を淡々と見せていく演出に圧倒されるが、今見返すと苦しい状態でも二人にとって幸せな瞬間が存在したことの方が、胸が痛くなる。第１話で最悪の印象だった仁美の印象が変化し、彼女もまた悩める母親の一人だったことが伝わる本作屈指のエピソードだ。

シナリオブックに収録された座談会[2]によると、坂元は奈緒と怜南の目線を描くことに力を入れていたため、初めは道木仁美のことをどこか〝悪〟として描いていたと振り返っている。だが、第1話放送の後、知人から道木仁美を「男におもねるメス豚のような女が子どもを虐待して……」という彼女のことを全否定するメールをもらった坂元は「これはいかん」と思い、当初の予定を変えて第8話で道木仁美の話を作ろうと考えたという。

シナリオブックの「あとがき」にも書かれているが、坂元は結末を考えずに物語を初めから順番に書いていくため、途中で当初の構想と変化することが多い。[3]これは毎週放送される中で視聴者の反応を自分の中にフィードバックできるテレビドラマならではの作劇方法だが、道木仁美のエピソードが生まれたのも、その結果だと言えるだろう。

そして、このエピソードを書いたことで、坂元は「加害者の救済」という最も難しいテーマを抱えることになる。

※文中の台詞は坂元裕二『Mother 1〜2』（河出文庫）より引用。

『それでも、生きてゆく』

そして、2011年の夏クール（7〜9月）に木曜劇場で放送された『それでも、生きてゆく』（フジテレビ系）で、坂元裕二の評価は決定的なものとなった。